

10年前の主なできごと

豊中市政研究所の設立は、平成9年(1997)4月1日。今年、10周年を迎えました。

「10年ひとむかし」。
そこで、今年度のニュースレターでは、これまでの豊中を振り返り、これからの豊中を考えます。

今年度第1号となる今号では、豊中に「住む」のこれまでとこれからを取り上げます。

- ・タンカー（ナホトカ号）から重油が流出。
- ・香港返還。
- ・神戸児童連続殺傷事件。
- ・ダイアナ元妃事故死。
- ・ホステス殺人の福田和子容疑者を逮捕。
- ・サッカーワールドカップ日本発出場決定。
- ・消費税5%スタート。
- ・山一証券自主廃業。

(ウェブサイト「ついこの前のような平成のできごと」
<http://www.geocities.co.jp/Milkyway/2493/>参照)

10年前に流行ったもの

- ・もののけ姫
- ・踊る大捜査線
- ・失樂園
- ・たまごっち
- ・ポケモン
- ・キシリトールガム
- ・タイガー・ウッズ
- ・新世紀エヴァンゲリオン

(ウェブサイト「ついこの前のような平成のできごと」
<http://www.geocities.co.jp/Milkyway/2493/>参照)

10年前の豊中

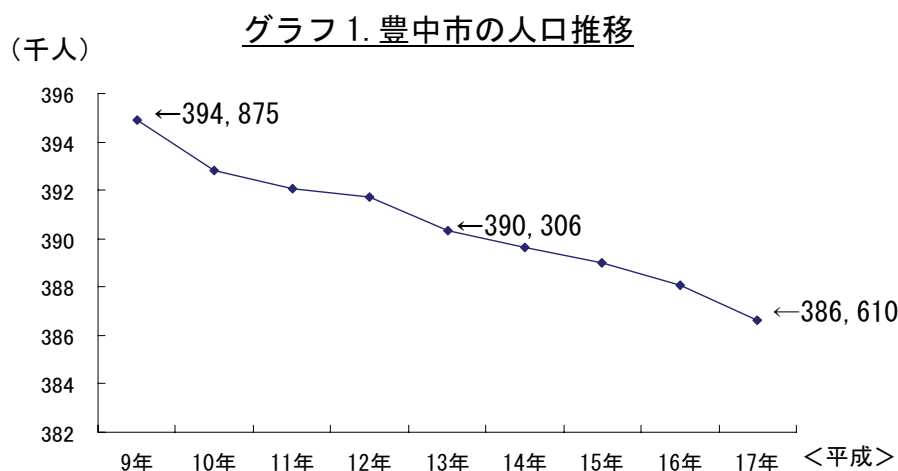
- ・震災復興住宅第1号三国住宅の入居開始。
- ・大阪モノレール「大阪空港－柴原」間、「南茨木－門真」間の営業開始。
- ・新・市立豊中病院が柴原町に新築移転、オープン。
- ・市立生活情報センター「くらしかん」完成。
- ・市立介護老人保健施設「かがやき」、市立東豊中老人デイサービスセンター完成。
- ・豊中市ホームページ「いきいき豊中」を開設。
- ・豊能地区3市2町（豊中市・池田市・箕面市・能勢町・豊能町）が「災害時相互応援協定」を締結。

(『新修 豊中市史 都市・集落』年表、
『広報とよなか』1997年1月号～12月号参照)

■ 10年間の豊中市内の人の動き

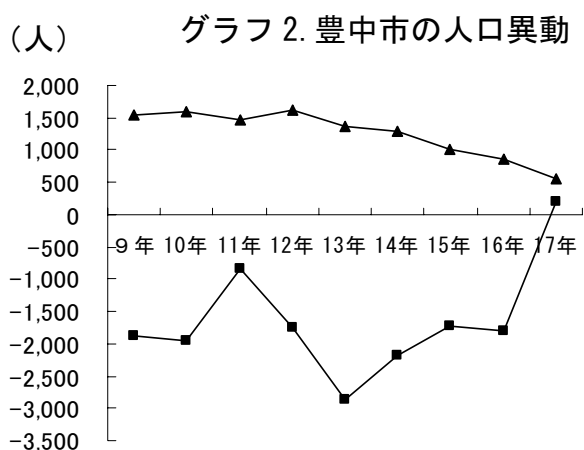
豊中市の人口推移

「住む」ということを考えるときに、その主体となるのは言うまでもなく「ひと」です。そこで、まず豊中市のこれまでの10年間の人の動きを、データをもとに見てみましょう。

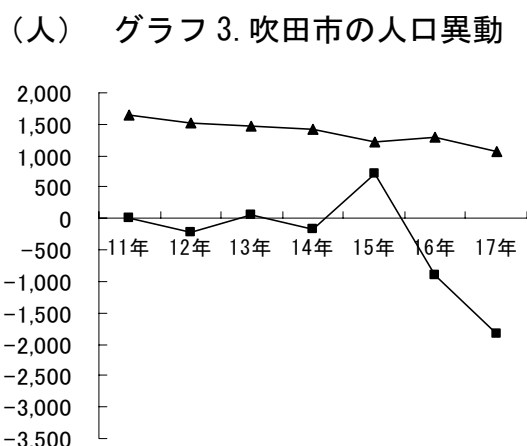


(豊中市統計書掲載の国勢調査結果を参照)

近隣都市との比較で見る人口増減の内訳



(豊中市統計書参照)



(吹田市ホームページ掲載「統計情報」参照)

上のグラフは、自然増減（出生人数－死亡人数）と社会増減（転入者数－転出者数）の年ごとの変化を表したものです。豊中市、吹田市ともに、自然減を示しています。これは全国の多くの自治体と同じ傾向にあると言えるでしょう。

一方、社会増減については、豊中市と吹田市では違いが見られます。豊中市ではマイナスからプラスに転じています。また、吹田市は、平成15年のプラスから16年、17年ではマイナスとなっていますが、近年の豊中市での集合住宅の建設が進んだこと、住宅の高層化、都市計画事業における地域開発などによって、転入者が増加したことの影響ではないかと考えられます。つまり、人口は自然減ですが、豊中市に「移り住む」人は増えていると言えるのではないのでしょうか。

■ 動いているまちー旭ヶ丘を例に

豊中市内では、時代の流れに伴って、また、住宅の建設や高層化、土地開発などによって、人やまち、住環境などが大きく変わった地域があります。

旭ヶ丘も数十年前と比べて、大きく変わり、今も変化し続けている地域のひとつです。ここでは旭ヶ丘を例に、まちの変化によって、そこに「住む」ということがどう変わってきているのかを考えてみましょう。

旭ヶ丘の住宅の変遷

平成9（1997）～15（2003）年

旭ヶ丘団地を建て替えた「アルビス旭ヶ丘」完成（1276戸）

平成18年（2006）

旭ヶ丘第二住宅（昭和43年建設の分譲住宅）を建替えた
「ガーデンフラッツ豊中旭ヶ丘」完成（208戸）

現在

戸建て分譲住宅「ドリームハウス旭ヶ丘」建設中



↑
アルビス旭ヶ丘



←建設中の
ドリームハウス旭ヶ丘



↑
ガーデンフラッツ旭ヶ丘

地域の様子がどれくらい変わったのかを航空写真で見比べてみましょう。



昭和35年（1960）頃の旭ヶ丘とその周辺



平成15年（2003）の旭ヶ丘とその周辺

（写真：UR都市機構提供）

2つの写真を比べると、団地は高層化され、周辺の田畑や雑木林だった部分には住宅がびっしりと建ち並び、40年ほどの間にこの地域全体が大きく変わったことが分かります。しかし、建替え後も旭ヶ丘内の住宅同士の間隔はそれほど狭まっておらず、広場や緑地などもあり、周辺の地域に比べて、敷地内のゆとりは保たれているように見えます。



20代。
戸建て住宅に親・妹と同居。
在住約8年。



30代。
UR賃貸住宅（旧公団住宅）に親・妹と同居。
在住約6年。



80代。
UR賃貸住宅（旧公団住宅）に家族と同居。
在住20年以上。

住環境について



「団地のあたりに外灯が増えて、明るくなったわ。」
「以前あった公園は暗くて怖かったけど、新しくなって明るく、安全になったみたい。」



「きれいでよく整備されているが、まち全体がつかられ過ぎている感じで、生活感が薄いなあ。商店街など、生活感のある場所がないから、寝るために帰るだけの場所という感じがな。」



「建替え前に比べて、明るく、開放的になったと思うよ。」
「敷地の真ん中にあるグラウンドは、地域の人が集まって、祭りや運動会をする集いの場となっているんじや。行事のときは他の地域の人たちも集まってきてにぎやかじゃよ。」
「グラウンド内にはテニスコートもあるし、地下には災害時に利用できる貯水池もある。これは自治会の提案で作ったんじやよ。」

現在の増築について



「新しい住宅が建つに連れて、若い人が増えたわ。若い人は夜型の生活が多いので、夜遅くまで立ち話などしていろいろさいわね。」



「正直、自分の生活に今のところ、特に影響はないので、何も思わないなあ。」



「これ以上住民が増えると大変なことになるのではないかと心配じゃ。ゆとりがなく、窮屈になっていくような気がするなあ。」
「自警団を作って、パトロールをやっているけど、あまりに住民が増えると、自分たちでやる防犯にも限界がくるからねえ。」
「子どもの数が急激に増えているけど、学校の数や設備はそのままなので、かわいそうじゃな。」

人間関係について



「自分が住み始めた頃からの知り合いとは挨拶するけど、新しい住民には会釈をしても素通りされるわ。親がそうだから、子どもも知らん顔をするわね。」



「隣近所とはほとんどつきあいがいいな。1棟に約80戸近くもあるから、顔さえ知らない人が結構いるよ。」
「公民館の催しや、自治会など、近隣の人たちとの交流の機会はたくさんあるけど、正直、なかなか参加しようという気になれないなあ。」



「近隣の自治会との関係が変わってきた。以前は張り合ったりしていたけど、今では合同で行事を催したりしているよ。今は自分の町内だけに固執せず、地域全体をみんなで良くしていくという時代なんじや。」
「自治会がとてもしっかりしていると思うよ。もっと多くの人に自治会に参加して欲しいなあ。」

自然環境について



「服部緑地が近いから、犬の散歩などにもよく行くわ。」



「静かで、緑が多いよ。」



「服部緑地が近いし、敷地内にも緑が多いよ。団地の建替え時には木がたくさん切られたが、昔からの自然を残してもらおうよ、住民が要望して、今のように緑の多いまちになったんじや。」

安全について



「バス通りにコンビニなどができて、夜でも明るく、安心して犬の散歩ができるようになったわ。」
「今建替え中の住宅のあたりは、人気もなく、暗くて怖い。ロープが張ってあるだけで、不審者が簡単に入れると思うわ。」



「学校が近くにあるためか、不審者の情報などはすぐに貼り出してあるよ。」
「道は明るくて、歩きやすいよ。」
「普段から住民同士の交流が少ないから、何か起こった時に、気軽には助けを求めにくいんじゃないかなあ。」



「空間が開放的になった分、外から人が入り込みやすくなったと思う。大きな事件は今のところないけど、子どもに対するいたずらなどは起きているんじゃないよ。」
「団地が高層化して、エレベーターが付いたけど、事故が心配じゃな。」
「道が広く、敷地内を通り抜けられるようになってきているのから、抜け道として利用する人が多くて、夜遅くまで交通量が多いんじゃない。」

生活の便利について



「スーパーや郵便局など、日々の生活に必要なものが揃っていて便利よ。」



「スーパーやホームセンターなんか近くて便利だな。」



「スーパーなどが近くて便利じゃよ。」

交通について



「バス停が近くて便利ね。」



「バスは発達しているけど、駅などへは遠いなあ。大阪市内へ出るにも結構と時間がかかるんだ。」



「バスの便が良いと思うよ。」

■インタビューを通して

旭ヶ丘の開発による変化によって、良くなった点、また新たに起こってきた問題についてまとめてみましょう。

<良くなった点>

- ・ 道が明るくなり、死角も減って、安全性が増した。
- ・ グラウンドができたことで、行事などを通して、人々の交流の機会が増えた。
- ・ 近隣の地域との関係が良くなった。
- ・ 近くにスーパーなどが増えて便利になった。

<新たな問題点>

- ・ 新しい住民とこれまでの住民の感覚の違い（挨拶、生活時間帯の違いなど）
- ・ 住民の増加に伴う安全管理の問題
- ・ 子どもの増加に伴う問題（学校の数や遊び場の不足、安全管理など）
- ・ 自動車などの交通量の増加

開発によって、環境面、施設の面で改善された点は多いと思われます。しかし、安全面や人間関係などにおいては、問題が複雑化している様子もうかがえます。

■住みやすいまちとは？

住みやすいまちとは一体どのようなまちなのでしょう。スーパーなどが近いといった利便性、緑が多いといった環境などはもちろん重要な要素ですが、まちをつくる要素で最も大切なのは、そこに住む「人」です。

住宅が増えれば、人が増えます。人が増えれば、まちが変わります。言うまでもなく、まちと人は切っても切れない関係にあります。住みやすいまちとは、まちだけが一人歩きするのではなく、そこに住む人と歩調が合っていなければいけません。例えば、住宅が増えることにより、危険も増えるのに、安全管理はそのままというのでは住みやすいまちと言えません。まちは住む人のためにつくられなければいけないし、また、そこに住む人がつくっていくものでもあるのではないのでしょうか。

まちが大きくなればなるほど、住民の年齢層や生活習慣、価値観が多様化し、それに伴って、人々がまちに対して求めるものも多様化していきます。また、実際に自治会や地域づくりの活動に参加したくてもできない人もいるでしょう。ですから、住民全員が、同じレベルで地域に関わっていくことは難しいかも知れません。しかし、自分の住むまちが良いまちであって欲しい、より良くなって欲しいという思いはみんなが持っているものではないのでしょうか。

まちをつくっていく中で、最も怖いのは、無関心と無責任です。また、それは、住宅を作る側にも言えることで、無責任に建物だけをどんどん建設していくというやり方では、そこに住む人のその後の生活が快適なものになるはずはありません。住民同士の無関心・無責任、住民の地域への無関心・無責任が生み出す問題が、住みにくいまちをつくり出してしまうこともあるでしょう。

こうしている間にも、いろいろな地域で住宅がどんどん建設され、また、団地なども更新されています。今後、千里ニュータウンの大規模再生も進んでいきます。そこには、どんなまちができるのでしょうか。そこに住む人たちが「ここは本当に良いところですよ。」と心から言えるまちができればと思います。

お知らせ

2005年度調査研究 **報告書** と **機関誌** を発行しました。

調査研究報告書

『地方自治体における協働型政策評価の可能性と課題3』

『地域コミュニティ構築に向けた基礎調査Ⅱ』

『豊中市における地域特性の再検討』

機関誌『TOYONAKAビジョン22』Vol. 9

特集テーマ：自然災害と向き合う

刊行物の概要、上記以外の刊行物についてはホームページでご覧いただけます。
ご購入のお申込みは、電話・FAX・メールで受け付けております。

豊中市政研究所 **ブログ** 「研究所の窓から」 を開設しました。

研究所からのタイムリーなお知らせや、研究員・スタッフが日々感じたこと、考えていることなどを発信しています。

また、皆さんとの交流の場としても活用していきたいと思っています。

ブログへは、<http://timr.bblog.jp/>、または豊中市政研究所ホームページよりアクセスできます。

8月1日から新 **事務局長** が就任しました。

新事務局長に北野繁が就任し、4月から事務局長を務めた畑中正昭さんが豊中市の助役に就任しました。

豊中市政研究所 **セミナー** を開催します。

テーマ：地縁団体への期待と果たすべき役割

日時：平成18年（2006）10月31日（火） 18：30～20：30

場所：豊中市立生活情報センター「くらしかん」 3階イベントホール

参加費：500円（資料代含む）

定員：100人（先着順）

※お問合せ・お申込みは豊中市政研究所（連絡先は裏面）まで、
電話・FAX・メールでお願いいたします。

伊丹康二研究員

1997年4月、私は大学院に入学しました。建築工学を専攻していましたので、できるだけたくさん建物を見るべく、近畿圏を中心に、あちこち出かけていました。建築物を見るときの視点は、建築物の計画と利用者の使い方。計画時に想定した使い方と実際の使われ方の差に関心を持っていました。また、いわゆる「有名建築」が竣工から10年ほどで衰えな姿をさらしている事例を見て、建築の計画とはなにかを考えていました。

現在の研究内容に当てはめると、まちの計画と市民生活の実態の差でしょうか。

保井大進研究員

10年前の平成9年といえば、豊中市に入庁した年。初めてづくしの毎日に右往左往していました。

振り返れば、仕事の道具一つにしてもいろいろ変わりました。ワープロからパソコンへ。フィルムカメラからデジタルカメラへ。そして、自身の体形も…これはどうでもいいですよ。

では、これから10年先は？時代の変化が早く、想像がつかないほどです。そんな中、どのようなまちづくりや行政経営が求められるのか。これまでを大事に、でもとられることなく、考えていきたいと思っています。

白岩正三研究員

1997年、私はまだ大学の3回生。一番の思い出は初渡米ですね。恩師がニューヨークの国連本部へと連れて行ってくれました。現地で活躍する職員の方々とお話をしたり、仕事の様子を伺ったりと毎日が刺激的でした。自分の生活と世界はつながっていることを実感しました。

あれから10年。その時感じたことをこどもたちに伝えていきます。主に小学生を対象に国際理解教育を提供。自分と社会問題との関係やその解決策を考えてもらうきっかけとなればと願っています。

「Think Globally Act locally」。いつも大切にしている言葉です。

あれから10年

豊中市政研究所設立10周年を記念して、10年前、研究員はどこで何をしてたのか、どんなことを考えていたのか、ちょっと振り返ってもらいました。

10年前の私は社会人2年生。

責任を持って仕事をするということの難しさと面白さが分かりかけてきた、そんな時期だったと思います。

今の職場に来てからもちょうど2年目です。より仕事が面白くなるよう、いつも工夫と努力を忘れずにいたいと思っています。

これまで、引っ越した回数が割と多い私ですが、どこに住んでもそれなりに楽しく、自分の住む地域が好きでした。その秘訣は地域に興味を持つこと。私はそう思っています。

9月末日を持って白岩研究員が退職いたしました。